

THE HEALING FOREST

*Medicinal and Toxic Plants of the
Northwest Amazonia*

Richard Evans Schultes and Robert F. Raffaelf



Foreword by H. R. H. Philip,
Duke of Edinburgh

「有情有霊一幕引顛末」

大 貫 信

花屋の前の湾に五年前は大型の鉄鋼船がひしめいていたが、今はドッグに船は見えない。不況が長引いている。花屋を出て湾を廻るように四分の一円弧行き、右に折れると漁師街の路地に入る。掘井戸のある角筋を曲がると門前に入る。石段を登り息を落ち着かせていると、左手に白梅が咲き掛けているのが目にとまった。職場を移り近眼の度が進んだ眼には、樹木に群がる蛾のように見える。父が買っておいた地面に五年前に石を建てた。眼前に歴史を刻んだ湾が見える。手桶の水を掛けながらタワシで磨いていく。頭上でトンビに脅えたカケスのけたたましい声がする。

父は戦後の経済復興計画立案に参画したが、清廉過ぎた。七日、四十九日と親戚が寄り来る日には雪が降った。死後おびただしい数のカンパスが残っていた。晩年、絵筆を動かしていたであろうものが朧げに分かるのは血の命脈であろうか。役所の後、公社に単身赴任したが、それも終わり帰宅した頃私は家を出ていた。母が女の人から来た一枚の葉書を見せたことがある。その絵の礼状は、勤務の最後に少しなりとも平安な日々があったことを思わせた。晩年に昇華されて初めて、物語る絵が描けると言われる。これは何も年齢のせいではなく、デフォルメのありようだろう。昇華というデフォルメが必要な絵画とメロデーが直接物語る音楽との差異は何によるのだろう。音階自体が既にデフォルメされた意味をもつのか、脳の解釈ソフトの違いなのか、それとも脳のデジタル、アナログの符号化の違いによるのだろうか。この辺が明らかになり既存の文化の多くが機械化されてしまう時代が来るのだろうか。

松平定信がなんらかの予見から半島の先に寺を建立して半世紀後、嘉永六年沖合に黒船

が現れた。沿岸警備で集められた諸藩の武士の中にはここで一生を終える者もいた。幕末にこの村に派遣された祖母の家族と出会った祖父は維新戦争で敗者となり遺族と共に青森県斗南村に幽閉される。「会津恋い鷹」（皆川博子著）に描かれた会津炎上は凄惨である。幽閉が解かれた明治五年、台北に渡り幕府側藩士達の辿った典型として後年署長になり、自決した。現代のように最期の有り様がさまざまに議論される時代ではなかった。そのいきさつについて父は終生語らなかった。父と長兄が海峡を渡り骨壺をこの寺に運んだ。諸霊を弔った寺の本山は京都の知恩院である。読経の中、大勢の人で混み合う除夜に怨霊の姿はなく、京に数ある行事の一つである。歴史の残忍さを祭りや仕来りにした京の人の感性には諧謔、達観、洒脱、諦観、が見られる。しかし一方では、種々の工芸を生んだ精神の緊張も京に育まれたものの一つであったはずで、それは単に都市が文化を派生するという社会・経済の構造特性だけでなく、歴史に対してある種の昇華能力があったからに他ならない。文化の生命力として精神の緊張と対局にある“貴なるものは俗なるものと紙一重である”という問題も孕んでいる。「その年の冬」（立原正秋著）に京都の家元制度の通俗化が描かれているが、第二部を書くことなく癌で絶筆となったこの小説に描かれるはずの事を読みたかった。

線香溜めを洗い終え、円を描く飛行を撮ろうとビデオカメラを向けると山向こうに消える。怨霊にせよ祭りにせよ人間は思い込みや考案されたイメージを巡らせて日々を過ごすしかないが、トンビは人の行為を狂気と思うだろう。妻が持たせた紙袋に取り替え用の缶コーヒーがあった。それを置くことにしたの

は母である。その母がお父さんの絵はいいねといったのは死後であった。子育ての後多くの夫婦の間で齟齬がひろがる。老いによる生の緊張から選択が先鋭になるのは自然である。人生を静かに生きようと徹した一方は風水の描写に生き、他方は社交で開放される。生の価値の違いは過ぎ去った思春期の陽炎^{かげろう}の違いであろうか。高齢化社会ではかたくなさが家庭以外の社会・政治の分野で現れれば「山の音」(川端康成著)の個人の老化の問題ではすまされない。だれしも人生の創造者であるが、独創的な観念には挫折がつきもので、「虚空遍歴」(山本周五郎著)には観念に生きた人間の末路と人生は未完に終わることが描かれている。

もと来た石段を降り、湾沿いに程なく行くとマリーナに出る。角型のコンクリート建ての中階段を上がる。窓の外のテラスには定石通りに白いテーブルがある。父の死後度々寺に来ざるを得なくなった私は、息抜きにこの喫茶店を見つけた。だから父と来たことはない。ある日父が突然三浦半島めぐりに私を誘った。朝からの曇天が観音崎を抜ける頃には驟雨になった。対岸の山向こうにあるペルーの記念碑に寄ったときの肌寒さだけが記憶に残った。父は終焉を見ていたのだとこの頃気づいた。

沖合からレジャーボートが白波を立て戻って来る。顔を横向け海を見ていたから、ひとが入って来たのに気づかなかった。季節はずれの湾奥の喫茶に一人で女が居るのがさすがにしく思えた。俯きすぎる姿勢が気になった。京都に行く一年前、未知のなにかの観念に緊張した息子に一人で勉強に専念すると言われたと、俯いて私の横に座っていた女友達の悲しい顔が思い出された。階下に降りると傾きかけた陽にマリーナの海面がさざ波で光っている。階下にもあるテラスの椅子に座って見ている。思いもかけず、女のひともすぐさま降りて来た。私を見て慌てて行った。エンジンの音がしたが、なかなか出ない。「私は

相談する伝手^{つて}の無い他人である」。車が去ると、海辺りに出た。波の音には立ち去り難いものがある。

(情報科学)

前期試験に備えて

1) 開館時間延長

7月19日(土)は、午後3時まで開館します。どうぞご利用下さい。

2) 研修室の開放

3階研修室を前期試験に備えて、閲覧室として開放します。

期間：7月14日(月)～7月28日(月)

時間：午前9時～午後7時(平日のみ)

夏休み中のお知らせ

夏期休暇中の開館・閉館・貸出等については、下記の通りです。

1) 長期貸出

7月25日(金)～9月17日(水)

但し、雑誌は対象外です。

2) 閉館

8月11日(月)～8月16日(土)

3) 開館時間

7月28日(月)～9月12日(金)

平日：午前9時～午後5時

土曜日：午前9時～午後1時



“~~~~?” “ムイト ボン、オブリガード!” (初めて使ったポルトガル語 : 街ではまったく英語が通じない!), 気温35℃以上、台風のようなスコール、毎晩飲んだセルヴェージャの味、セニョリッタと踊ったサンバ、ネットプレイでもぎ取ったテニス・シングルスチャンピオン、お世話になったプロジェクトリーダー宅での美味しい和食そしてブラジルの人々の心・・・赤道直下ブラジル・パラ州ベレンで私が変身できた3か月間の思い出です。

それ以前は何も知らなかった現実のアマゾンには、地球上の植物の16%が生育する植物の宝庫ですが、環境破壊により貴重な植物資源がダメージを受け、同時に、先住民族のインディオやこの地方独特の伝承も失われつつあります。このような状況下、日本の国際協力事業のひとつとしてブラジル政府と進めているブラジル・アマゾン農業研究協力計画があります。一昨年、私はこのプロジェクトに参加し、アマゾン河口の都市ベレンで国立湿潤熱帯農牧研究センターの研究員とアマゾン産生薬の化学分析を行う機会を得ました。主なテーマは、絶滅の危機にあるミカン科ジャボランジに含有されるピロカルピン(緑内障の診断及び治療薬)の定量分析と優良種の系統選抜を行うこと、強心配糖体を含む薬用植物のスクリーニングを行うことでした。

その際、ガイドブックとして研究員のセルジオといっしょに勉強したのが『THE HEALING FOREST』です。本書は、アマゾン西北部(ブラジル、コロンビア、エクアドル、ペルー)の半世紀に渡るフィールド調査を集大

成したものです。著者らは、民族植物学(ethnobotany)と植物化学(phytochemistry)をバックグラウンドにして145科、596属、約1,500種の植物を記載しています。しかし、それらの約半数は化学的、薬理的な評価がほとんどなされていません。研究材料としてワクワクする魅力的な素材で溢れています。

人類が地球上に生存できるのは、衣食住はもとより、病苦からの解放も植物界の恩恵に負っていることを、日常生活では見過ごしてしまいがちです。人類は古代より植物に薬と毒を求め続け、近年再び、新薬探索のソースとして植物などの天然物資源が世界的に注目されています。また、薬公害の反省から生薬や漢方薬が見直され、ハーブやアロマセラピーもブームとなっています。

ブラジルの研究者をはじめ本学の先生方にもご協力いただき、アマゾン産生薬の免疫薬理活性の評価と平行して、植物バイオテクノロジーによる基原植物の保存と増殖を行うための実験を続けています。インディオの知恵で、傷の痛みの軽減にコカ葉を塗布していたことから、局所麻酔剤のコカインが発見され外科手術に役立ったように、アマゾンのフローラから次世代の人々に有益な薬が、環境を損なうことなく提供されることを夢みて……。

(薬学部附属薬用植物園)

閲覧ニュース81号

1997. 7 発行

北里大学教養図書館

〒228 相模原市北里1-15-1

発行責任者 横井 洋太

電話 (0427) 78-8005